「襞のあわいに深く入り込んでいって…」をめぐって（10）

襞のあわい――その火口（ほくち）⑩

天理大学人間学部教授
松田　健三郎　*Kensaburo Matsuda*

つぎの文言を引くことから、稿を始めよう。

それはあたかも、音楽が伝統的な形を完全に変えて、その同じ時期に神話的思考が放棄しかけていた機能――知的であるとともに情的でもある機能――をひきつごうとしたかのようでした。[1]

「それ」とは、前稿にもあるように、「十七世紀はじめのフレスコバルディや十八世紀はじめのバッハとともに西洋文明に現れた音楽、十八・十九世紀のモーツァルト、ベートーヴェン、ワグナーによって花開くに至った音楽」のことであった。

この「事実」を、レヴィ - ストロースはワグナーの四部作『ニーベルングの指輪』から説明する。四部作中、重要な音楽テーマのひとつとして「愛の断念」と呼ばれるものがある。このテーマが最初に現れるのは第一部「ラインの黄金」――アルベリヒにラインの乙女たちが、人間の愛をすべてあきらめなければ黄金をかちとることはできない、と告げるとき、ついで、第二部「ワルキューレ」――木の幹に突きささっていた剣を引き抜いたジークムントが、その剣によってジークリンデが自分の妹であることを知り、彼女との恋におちいる、まさにその瞬間、まさに近親相姦的関係がはじまろうとするその瞬間に「愛の断念」のテーマが現れる。しかし、レヴィ - ストロースはここに謎をみる。ジークムントが、このとき生まれてはじめて自分の妹ジークリンデとの愛を知る――「愛の断念」のテーマに相反したふるまいにあるからである。同じことは、このテーマの三度目の現れについてもいえる――神々の王ウォータンが娘ブリュンヒルデを魔法の眠りにつかせ、焔で囲む、つまり自分の娘への愛をあきらめるとはいえるのだが、レヴィ - ストロース自身、「あまり説得力のある説明ではありません」といわざるをえないからだ。

最初はともかく、同一のテーマの二度目、三度目の現れにみられる、ある意味、破綻めいたもの――ここに鍵がある。だから、いわれる、「こう見てくると、音楽でも問題は神話とまったく同じであることがおわかりでしょう」。

このテーマが不思議に何度も現れてくるのを理解する唯一のみちは、一見したところ非常に違って見えるこの三つのできごとをひとまとめにして、積み重ね、ひとつの同じ出来事として扱うことができるのではないかと探求してみることです。[2]

つづけていわれる、「これが私の申し上げたいことなのです」。「神話と音楽」をその第五講とする『神話と意味』は、第一講に「神話と科学の出会い」をもつが、その一節にいう、「私は子どものときから…構造主義者であったようです」。かれのことばを追ってみよう。

母の言うところによると、私がまだ二歳ぐらいで、もとより字など読めなかったころに、ほんとうに字が読めるのだと主張していたそうです。なぜそんなことを言うのかと問われると、店の看板――たとえばboulanger（パン屋）とかboucher（肉屋）――を見れば、何か読めるものがあると答えました。というのは、書いてあるなかで明らかに同じ綴字の部分はboucherとboulangerに共通の最初の音節であるbou- を表すにちがいないからでした。構造主義的アプローチとはこういうもので、おそらくそれ以上に何一つつけ加えることはないでしょう。それは不変なものの探求、言いかえれば、外見上の相違のなかに不変の要素を求めるものです。[3]

そうはいっても、「神話は人間のなかにおいて、人間自身が知らぬまに考え出される」とも「以前から現在にいたるまで、自分の個人的アイデンティティの実感をもったことがありません」[4]とも付言するレヴィ - ストロースではあるが、それをも含意して「不変なものの探求…、外見上の相違の中に不変の要素を求める」こと――それを構造主義的アプローチとする。テーマ「愛の断念」の三度の現れは、こういう脈絡に棹さしているのだ。

さて、生まれついての構造主義者レヴィ - ストロースはその固有のアプローチのもとになにを追求するのか。もとより「不変の要素」――「愛の断念」のテーマに共通して認められること、そこに不変の要素がある。それはいずれもなにか非常に大切なものであって、それに固着しているものから取り上げたり、無理やり引き離したりしなければならないものとしてあるという。第一部「ラインの黄金」ではラインの淵に沈む黄金、第二部「ワルキュール」では、剣の突きささった生命あるいは宇宙を象徴する木、第三部「ジークフリート」では焔のなかから救い出されねばならぬ女性ブリュンヒルデがそれにあたる。ここに、レヴィ - ストロースがみようとする「不変の要素」は、黄金と剣そしてブリュンヒルデが同一のものであるとあるということ、なぜなら、黄金は権力を獲得する手段であり、権力を象徴する剣は愛を征服する手段であるといってもいいからである。こうして、第四部『神々の黄昏』最終章、なぜブリュンヒルデをとおして黄金がラインに戻ったかという疑問が氷解するという。

ここに、「不変の要素」としての「同一のものであること」、すなわち、同一性が構造主義的アプローチの求めるものとしてしっかりと確認されるわけだ。では、その意味はどこにあるのだろう。なぜこの同一性を「不変の要素」としても求めなければならないのだろう。レヴィ - ストロースにとって、この構造主義的アプローチの帰結はなにを意味しているのだろうか。『ニーベルングの指輪』をその一例としてあげた、ある時期の音楽がひきつごうとしかけたようなある機能――それは、今回冒頭にもあることだが、その同じ時期に神話的思考が放棄しかけていた機能でもあった。構造主義的アプローチ帰結の意味はそこに求められるし、げんに『神話と意味』の第三講「兎唇と双生児」は、かく機能する。

十六世紀末、スペインの宣教師P・J・デ・アリアーガ神父は自著『ペルーにおける邪教の根絶』に、とある謎めいた見聞を記しているという。当時のペルーのある地域では、厳しい寒さが襲ってくると、生まれたとき逆子だったとわかっている者、兎唇の者、双生児がみな僧侶に呼び集められ、責められた。この寒さの原因は、かれらが塩と唐辛子を食べたせいだというのである。

双生児を気象異変に関連づける例は、世界中に広く見出せる。しかし、双生児と兎唇をポジティブに関連づけることは、アイアーガを幾度も引用しているあのフレーザーも気がつかなかったという。なぜ兎唇と双生児、そして逆子をひとまとめにするのか。問題の要はここにあるとレヴィ - ストロースはみる。

［註］
（1）レヴィ - ストロース、C.『神話と意味』みすず書房、1999、p.64。
（2）同 pp.66 ～ 67。
（3）同 p.10。
（4）同 pp.1 ～ 2。